# 国　　語

（問　題）

2022年度

〈R04132064〉

## 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子および解答用紙には手をふれないでください。
2. 問題は3～19ページに書かれています。本文は二段になっています。試験中に問題冊子の印刷が見にくい、ページがぬけている、解答用紙のよごれなどに気づいた場合は、手をあげて監督員に知らせてください。
3. 解答はすべて指定された場所に、HBあるいはBの黒の鉛筆またはシャープペンシルでていねいに記入してください。
4. 解答用紙記入上の注意
   （1）解答用紙の指定された場所（2カ所）に、氏名および受験番号を正確にていねいに記入してください。
   （2）指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。
   （3）受験番号は右づめで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないでください。
   （4）解答用紙は折り線のところで折ってから解答してください。
   （5）解答の際は、「、」や「。」も一字と数えます。
5. 解答はすべて指定された解答らんに記入してください。指定された解答らん以外に何かを記入した解答用紙は、採点しない場合があります。
6. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにしてください。
7. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出してください。
8. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

## 一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一五年以上前のことだが、けがをしたイノシシの幼獣を猟仲間が保護してきたことがあった。前足を骨折しているようで、晩秋の山の中で、そいつは這うように歩いていたそうだ。猟期中に出会うイノシシの子どもにしてはちょっと小さめでえいよう状態もよくなさそうだった。

「さばいて食べるには痩せてて小さすぎるし、ほっといたら冬はこせへんやろうしなあ……。」

とりあえず前足にそえ木をして、元気になるまで飼ってみることにした。

そいつはあっという間に僕たちになついた。手からエサを食べるようになり、そばで丸くなってスヤスヤと眠るようにもなった。

飼い始めて一週間ほどしたころに、京都市動物園にある野生鳥獣救護センターの存在を知った。そこではけがした野生動物を引き取ってくれるそうだ。せんもん的な知識を持った人たちが世話をしてくれるならそれにこしたことはないと思い、さっそく連れて行った。

別れぎわ、そいつはピーピーと悲しそうな声で鳴きわめいた。

「めちゃくちゃなついてますねえ。野生のイノシシではこんなの考えられへんなあ。」

センターの職員さんもびっくりしていたのが印象に残っている。

……と、こんな思い出を知人に話したところ、①最近は野生鳥獣救護センターではイノシシは保護していないということを教えてもらった。イノシシだけでなくシカやタヌキ、スズメ、ヒヨドリなどの「農作物等に被害を与えている野生動物」の一部については、二〇一三年から救護の対象外となったという。

「へえ、そうなんや。まあ確かに獣害は深刻やからなあ。ただ、けがしたキツネは助けてあげるけど、弱ったタヌキは見殺しにしとけってわけか……。それもどうなんやろ。」

近年、②野生動物と人間との間の軋轢が強まっている。

二〇二〇年秋も全国各地でのクマによる人身事故のニュースは、聞かない日のほうが珍しいくらいだった。全国の鳥獣による農作物被害額は、二〇一九年度のデータで一五八億円。これは、ピークだった二〇一〇年度の二三九億円からは漸減していっているが、まだまだ高止まりしていると言っていい水準だろう。僕の暮らす京都でも、苦労して育てた水田にイノシシが入りこみ、大半のお米がダメになってしまったという話や、サルに散々やられて野菜を育てるのを諦めたというような話をよく聞く。幼木の食害や樹皮はぎなど林業への被害も深刻だ。

道路に飛び出したシカと車の衝突事故や鉄道事故も頻発している。また、野生動物が人里周辺に出没する機会が増えたことにより、動

物たちに寄生するヤマビルやマダニも増加している。ヤマビルによる吸血被害やマダニによる感染症被害も、山林だけでなく、公園やキャンプ場、河川敷、民家の庭先でまで発生している。

「山が荒れているから、③動物たちが里に降りてくるんだ。」

よく言われる物言いだが、実際にそうなのだろうか。

日本の山では、戦後の拡大造林政策のもと、スギやヒノキなどの針葉樹が大量に植林された。しかし、近年は安価なゆにゅう材におされ、日本の林業が停滞する中、その森の多くは、間伐なども十分に行われないまま放置されている。そこは野生動物の食べ物も少ない暗い森だ。確かに山は荒れている。

一方、里山林と呼ばれる落葉広葉樹の森も放置されている。この半世紀ほどの間で、里山からの重要な産物であった薪や炭などを、主要なエネルギーとして使うことを人間は放棄した。その結果、薪炭林の主要な樹種であったコナラやクヌギ、カシなどの木々が巨木化し、どんぐりをたくさん実らせるようになり、クマやイノシシなどのどんぐりを食べる野生動物にとっては楽園のような場所になった。また、小さな果実をつけるヤマザクラやエノキなどには野鳥や小動物たちが集まってくる。

つまり、「山が荒れている」ことは間違いないが、それは「山にエサがない」「住みづらい」ということを意味するわけではない。奥山にまで大規模に針葉樹を植林して放置する一方で、人里近くの広葉樹林をエサ場として提供しているという構図が出来上がってしまっており、意図せず野生動物をわざわざ人里周辺に誘引（※）しているのである。その野生動物たちが山ぎわの農地の作物に目を付けるのは当然だ。また、シカなどの草食動物はそもそも山の中で暮らすというよりは、山ぎわの日当たりのよい草がよく生える平野部が本来の生息環境なので、「里に降りてくる」のがむしろ当たり前なのである。

「④昔の里山では、人間と動物が住み分けしていて共存していた。」

これもよく耳にする言葉だ。「昭和の里山」がまるで理想郷であったかのように語られることもある。野生動物との緩衝地帯（※）としての里山を復活させようという取り組みも各地で行われている。確かに、人間が頻繁に山に入るようになると、ある程度は動物たちもいやがるようにはなる。ただ、そこにエサがある限り、人の気配のない夜には野生動物はおどろくほど堂々とやってくる。油断すれば、人間の生活圏内にある農地にまで入りこむのだから、ある意味当たり前の話だ。

そもそも江戸時代以前、人間の暮らしは「昭和の里山」時代などとは比べ物にならないくらい山に依存していた。人々は頻繁に山に入り、食料や毛皮、薪、建材、染料、薬など、様々なものを山から調達していたが、それでも獣害は発生していた。シシ垣と呼ばれる獣よけの大規模な石垣を作り、収穫期には寝ずの番をした。青森の八戸では、猪飢渇と呼ばれる飢饉が起きたとの記録がある。冷害

にイノシシの害が重なり、三〇〇〇人が餓死している。獣害対策で江戸時代の農民は武士よりも多く鉄砲を所持していたということも知られている。

日本では、江戸末期から明治以降の急速な近代化や人口の激増などで、人間の森林利用が進み、野生動物の生息域は激減していた。また、食料調達や戦時期の毛皮需要などの乱獲でその生息数も減少。戦後復興から高度経済成長へと突き進む中で、大規模植林や山林の宅地開発も進み、生き延びた野生動物たちは山奥へと追いやられていった。

つまり、山間部の農地で獣害対策もせずに農業を行うことができたこの百年ほどの期間は、人間と野生動物の関係史の中で特殊な時代だったと考えるべきだろう。野生動物が激減していたからこそ成り立っていた平穏な時代だったのだ。ただ、放置された森の中で、いったん数を減らしていた野生動物たちは着々と生息数を回復させてきた。そして、二一世紀に入り、再び人間の生活圏へとあふれ出てきたのである。

⑤この時代にどのように野生動物と向き合っていくのか。

野生動物たちが総じて数を減らしていた時代は、「自然を守れ」と訴え、動物たちを「保護」してさえいれば、それが「共生」だと思っていられたかもしれない。X美辞麗句を並べ立てていればそれで済んだ。それが人間と動物との軋轢の強まっているこの時代には通用しない。

僕が猟を始めた二〇年前はシカ・イノシシの有害捕獲数は一〇万頭程度で、狩猟による捕獲数のほうがずっと多かった。狩猟によってとられた獲物は多くは食用とされる。それが二〇一〇年ごろに逆転し、二〇一六年度のデータでは、シカとイノシシだけで八〇万頭以上が有害獣として捕殺され、その多くが埋設・焼却処分されている。野生動物が廃棄物として捨てられているのだ。本当にこの二〇年だけ見ても状況は様変わりした。

このようにして守られた農作物を食べながら、僕たちの今の暮らしは成り立っている。野生動物たちの無数の屍の上に存在しているのがこの現代社会なのである。これで⑥野生動物と共生していると言えるのだろうか。

人類が農耕を開始して以来続いてきた獣害との戦いの歴史が再開されたと考えればいいのかもしれないが、ここまで人間が勢力圏を拡大した中での野生動物とのトラブルは、これまでよりも圧倒的に大規模なものだ。現状は、防獣柵などを整備しつつ、有害捕獲をひたすら拡大するという、ある意味場当たり的な対応で乗り切ろうとしている。だが、野生動物とどう向き合うべきか、⑦社会全体での合意形成がそろそろ必要な時期なのではないだろうか。

有害捕獲を担うのは、多くが猟師である。ただ、本来、猟師は野生動物を「邪魔だから減らそう」などと思ってとったりはしない。豊かな自然があるからこそ、獲物となる野生動物たちが暮らすこと

ができ、猟を続けることもできる。これは自然界の動物たちがやっていることと同じで、食う食われるの関係を持ちながら、同じ森で暮らしている。これが自然界での共生である。

「そこにいてくれてありがとう。」

そう思いながらその命を奪いたい。彼らを「害獣」などと呼びたくない。これが多くの猟師の思いである。僕はこの感覚の中に、現代社会での野生動物と人間の共生のヒントがあるのではないかと思う。

⑧ 僕は今後もけがをした子どものイノシシがいたらきっと助けるだろう。でも、その同じ山でそいつの親をとって食らうかもしれない。

（千松信也「猟師が考える野生動物との共生」より・一部改）

※誘引……さそい入れること。

※緩衝地帯……不和や対立をやわらげる中間の場所。

**問一** ――a「えいよう」・――b「せんもん」・――c「樹皮」・――d「ゆにゅう」を、漢字はひらがなに、ひらがなは漢字に、それぞれ直しなさい。

**問二** ――X「美辞麗句」とありますが、この四字熟語は「美辞」と「麗句」という似た意味の二字熟語を組み合わせてできています（「美辞」も「麗句」も、「うつくしくかざった言葉」という意味）。これと同じ成り立ちの四字熟語となるように、次の 1 ・ 2 に当てはまる漢字二字をそれぞれ答えなさい。

牛飲 1　　金科 2

問三 ――①「最近は野生鳥獣救護センターではイノシシは保護していない」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 保護という形での人間の介入により、野生の生態系が破壊されるのを防ぐため。
イ 保護するのではなく死なせることにより、人間に害を与える野生動物を減らすため。
ウ 生息数の多いイノシシなどの保護を減らし、希少なキツネなどの保護に集中するため。
エ 獣害の多発により住民の理解が得られず、野生動物保護に必要な経費が集まらないため。

問四 ――②「野生動物と人間」とありますが、その間に起こっている問題として適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 野生動物と車や鉄道とが衝突してしまう交通事故が増えている。
イ 苦労して育てた農作物が野生動物に食い荒らされてしまっている。
ウ 野生動物の増加を引き起こしたため、林業自体が非難されている。
エ 野生動物に寄生する虫が増えたことにより、感染症が広がっている。

問五 ――③「動物たちが里に降りてくる」とありますが、その原因として適切なものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア シカなどの草食動物が、本来の生息地である平野部に戻ってくるようになったから。
イ 奥山が野生動物にとって食べ物を見つけることの困難な住みづらい森となったから。
ウ 人口増加にともない、人間が野生動物の生息地から食料を調達するようになったから。
エ 里山の広葉樹林がエネルギー源の変化に伴い放棄され、野生動物のエサ場になったから。

問六 ――④「昔の里山では、人間と動物が住み分けしていて共存していた」とありますが、これに対する筆者の意見として適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高度経済成長の時期は、野生動物の数が減っていたために、住み分けはできていたが、共存していたとはいえない。

イ 戦後復興の時期は、人間の側で野生動物に対する特別な対策が必要なかった時期であり、住み分けも共存もできていた。

ウ 江戸時代以前、人間が山に依存する一方、動物も里の食料に依存していたが、共存関係にはなく、住み分けもできていなかった。

エ 森林と農地のあいだに里山を設けていた時代も、動物はエサをもとめて人里に降りてきたので、住み分けも共存もできていなかった。

問七 ――⑤「この時代にどのように野生動物と向き合っていくのか」とありますが、筆者は猟師としてどのような仕事をせざるをえなくなっているのですか。「仕事。」につながるように、二十字以内でまとめて答えなさい。

問八 ――⑥「野生動物と共生」とありますが、これが成り立つ場所は何と表現されてきましたか。本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問九 ――⑦「社会全体での合意形成」とありますが、なぜ今「合意形成」が必要なのですか。その理由として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 人間が野生動物との関係を真剣に議論せず、無計画に有害獣を殺し続けているから。

イ 野生動物を食用として有効活用することができれば、食料問題の解決につながるから。

ウ 野生動物が殺されることで、ここまで豊かになった自然が失われる危険性があるから。

エ 人間が受けてきた被害のみが話題となり、動物に与えてきた悪影響が無視されているから。

問十 ――⑧「僕は今後もけがをした子どものイノシシがいたらきっと助けるだろう」とありますが、筆者はどのような考えにもとづいて助けるのですか。「という考え。」につながるように、三十六字以上四十五字以内で考えて答えなさい。

問十一　この文章の書かれ方の説明として適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　歴史的なことがらをふまえ、その場しのぎの方法を批判している。

イ　現代的な問題に対して、「共生」にいたるための解決策を明示している。

ウ　一般的（いっぱんてき）な考えに対して、筆者が猟師としての立場から意見を述べている。

エ　筆者の実体験をふまえ、野生動物についてのよく知られていない事実を示している。

## 二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

親というものは、子供が危ない目にあうのではないかといつもやたらと心配していて、子供が家を出発した瞬間から後悔しはじめる。「私」（次郎）が十代の半ばだったころ、やはりそのようなことがあった。二人の弟が昼飯時から姿を消したまま、夜になっても帰らず、父の会社に電話をした母によると、父が次郎にさがさせろと命じたという。

とうとうさがして来いと言うのだな！　と思うと私はまた腹が立って来た。「次郎にさがさせろ！」と父が言ったというのもどうかわかるものか。

「ね、さがして来ておくれ。」

「さがしに行ったって無駄ですよ。一体どこにいるかというあてもないのに。いつもの事ですよ。すぐ心配するんだ。この間だって。――」

と言いながら私は母のおろかなる心配なるものの例をれっきょし出して、毎度の心配のまきぞえになって、いつもの馬鹿げた捜索にやられるのを徹頭徹尾回避しようとした。

「帰って来ますよ。三郎だって十にもなっているんだから迷子になっても心配なんかありません。」

しかし母も負けていずに、迷子を出した不幸な家の考証をはじめた。そして最後には父の命令もあるのだし、

「強情はってゆかないのならお父さんに言いつけるよ」と厳しい眼をした。

「だって、腹も空いてるし。」と私は言った。本当にそうでもあったし、また一つにはこうなれば飯に難癖をつけてすねてやれ、そのうちに帰って来るかも知れないというのが私の腹であった。

「だから御飯も用意してあるから。」

と言うので立って行って見ると、電灯の光の下の卓袱台の上には私一人分だけの茶碗やその他の陶器がその冷たい肌の上におのおの一つずつの電灯の小さい影像を写し出している。落ち着いて飯でも食ってやれという意固地な計画も気が乗らなくなってしまい、こんな時には意地にでも空腹を抱えて飛び出すというあてつけの方が私の腹立ちには快かったので、私は第一、そんなさびしい食卓では食欲が起らなかったし、ちゃんと用意までしてあるんだなと思うと、①誰が食ってやるものかと思った。

「お前食べないのかい。」

私は腹が立っていたので返事もせず、足音であたり散らかして、どんどん家を飛び出した。

まず私は近所の〇〇さんや××堂へ行って、弟達を見なかったか

とか、どこかへ行くと言っていなかったかとか言ってききただしたが、何の手がかりもえられなかったので、不平でぶーぶーふくれ面をしながら暗い路を〇〇神社の方へあるき出した。私の心の中の不平はいきどおりとなって、その道々弟達の上に燃えた。

「つかまえたら、なぐりつけてやる。」

しかしその報いられない捜索が別に確かなあてのあるものでもなく、そして何というつまらなく腹立たしいことを強いられているのだろうと思いながら、そのにぎやかな通りをあるいていると、小料理屋の格子から冷たい夜気の中へ白く湧き出て来る湯気や、醤油のたきつまるにおいはたまらなく私の空腹をさびしがらせはじめたのだった。するとまた、こんな考えも浮かんで来る。――（もう彼らは家へ帰っているかも知れない）そんな気持ちが湧いて来ると、一人で空腹を抑えながら不熱心にその辺りをほっつき歩いている私には、そのこうつごうな想像がやがて本当の事実として映るようになり、無責任にいい加減歩きまわったのを機会に私はまた急いで家へ帰りはじめた。

「帰っていたら、いきなりぶってやる。」

私はまだ不平を街上に鳴らしながら家まで帰った。

しかし私のその急き込んだ予想も、家のしきいをまたいだ瞬間にそれが裏切られていたことがわかった。弟達はまだ帰っていなかった。しかし会社からは父が帰っていた。

「どうだった。」

父は尋ねた。

「〇〇神社へ行ったのですがいませんでした。」

「××町は。あの△△は。」

「行きませんでした。」

「あそこをさがしておいで。」

空腹の私に飯も食わさないでもう一度近くもない××町までやろうとする父の気持ちが乱暴にも、残酷にも言語道断に思えた。（飯も食わずに〇〇神社まで行ったんだぞ）と心の中ではぷんぷんいきどおっていた。父の前には温かな湯気を立てている鍋があった。私はそのにおいに力強くひきつけられた。

さっき食わずに出たものを、母がなぜ、飯を食ってからゆけと言わないのだろう、私にはそれがまた腹立たしかった。私はまたこじれた考えを抱いた。ここで飯を食おうと言いはろう。父は私がもう飯をすませた事だと思っていただろうから私がすぐにゆけるつもりでいたのだろう。それだから、飯を食おうと言うともどかしがって、飯は後にしてと言うだろう。そこで口答えをしてやろう。別にそのように意地悪い論理を働かした訳ではなかったにせよ、飯を食わせろと言った私の心は不平のあまりたしかにその辺を大きくねらっていたに違いなかった。

「先に御飯を食べさせてもらいます。」

「なんだ、御飯はあとにしてすぐ行っておいで。」

「お腹がへってるんです。」

「それじゃ、三郎や四郎はどうなんだ。あれらも腹を空かせてるじゃないか。」

「それは勝手です。」

②自分ながら言い切ったなと思った。

父が見る見る目に角をたてるのを母は制しながら、さっき食ってゆけと言ったのを食わずに行ったのだからと言って飯の用意をしてくれた。

私は意地わるくそれを見ながら、うんとこさ食ってやれ、と思っていた。しかし意地もなにもない真正の空腹にその飯は意地でも張りでもなく本当にうまかった。しかし私が飯を食いかけるが早いか、私はもうさがしにゆかなくてもいいようになった。弟達が帰って来たのだった。

下駄をぬいでいる小さい足音をきいた時、私達はおやと思った、帰って来たのかな。そう思った瞬間、彼らは一体どこに今までいたのだろうという疑問やその時まで私の心の底にあった心配が自由によみがえって来た。

電灯の光の下へ、ぱたぱたと姿を現した時彼らは二人とも、しょげて、真面目であった。それで父や母に対するこじれた気持ちもその瞬間ずっと薄れてしまったように思えた。

「帰って来た。」

十になる三郎はものにおびえた表情をしていたし、七つの四郎は泣いていた。

「どこへ行ってた。」

父はまず厳しくきいた。三郎は、※築港へ軍艦を見に行ったのだと低い神妙な声で答えた。この間さかんに母にゆかせてくれるように三郎がねだっていたのを私は思い出して私は合点が行った。母はいつもの心配性でその時肯じなかったのだった。

「築港へ。」

父も母も少しあきれていた。もちろんそれは無鉄砲な遠足に相違なかった。

「馬鹿、ここまでおいで。」

私は父が三郎を※折檻しやしないだろうかと思った。

すでに入る時泣いていた四郎は、だんだん泣き声を大きくしてわめき出した。声を大きくすればするほど、そして涙を流せば流すほど、彼がこの家へ帰りつくまでになめつくした、恐怖や、空腹や、たよりなさや苦痛の痛手がそれだけ早くいえるかのように。またその泣き声は家へようやく帰りついた、重荷を下ろした喜びのあまりの泣き声だったのだ。その泣き声の合間合間に四郎は「……でさんちゃんが……したんだよう」と言ってわけのわからない※讒訴をはじめた。

永い間の心配からの解放の気持ちも私にはよくわかった。それは※志賀直哉の「真鶴」や※芥川龍之介の「トロッコ」にかかれている子供の気持ちそっくりの気持ちであったにちがいないのだ。「しかし四郎あまえてやがるな。」と私は思わざるを得なかった。それゆ

え、彼をただ泣かしておくだけで何ともかまってやらない母の③正当な処置が私には快く思われた。

年も小さく末っ子ではあり、みなにかわいがられているゆえか、四郎の、大きな泣き声ですぐ父母のふところの中に飛び込んでゆくという風の※叱責を予期していない、そしていじけていない、無邪気なやり方はたいていの時は気持ちのいいものであったが、今の場合はそうではなかった。常から四郎に比べてはあまやかされていない三郎が、たとえ、その脱出について責任があるとはいえ涙一粒出さずに父の前で神妙にさばかれているのを見ると④私の同情はむしろ三郎にあった。

父はまだ折檻しなかった。折檻したら、私にも言うことがあると思った。

「三郎がこの間もあんなにねだっていたのに、なぜか父や母はやってやらなかった。やってやらないから、行きたさの募ってこのようなことになるのだ。お弁当をつくってやり、電車の小遣いをやれば、三郎にだって独りゆけないことはないのに。築港までの往復は五里以上あるぞ。それをあの子達は往復歩いたのだ。」

私は彼らの罰以上の罰である、往復の苦しみをいとおしく思う気持ちと、いつも友達との山登りだとかなんだとかに誇大な心配をするばかりで賛成してくれたことのない父母に対するいきどおりがかたみに燃えた。

「馬鹿」を幾度浴びせられた事だろう。三郎は母におしえられて父に詫び、そしてもう二度と黙って遠い所へゆくようなことをしないと誓わされた。

三郎が頭を下げているかたわらでは、四郎はまだ時々思い出したように大声をあげては泣きじゃくっていた。

三郎はまた、母におしえられて、私に心配させ、さがさせたのを詫びに来た。彼もそろそろたえ切れずに泣きはじめた。

「寒かっただろう。」

とか言ってなぐさめてやればやるほど、⑤大きな声で泣いた。

父も一通りしかれば、やはり当然すぎる同情をあらわして、泣きやんで飯を食えと言った。母も心配から解き放たれて、満足そうであった。茶碗がかちゃかちゃなってにぎやかな夕げになった。

築港もこのごろはずいぶん家も立っているがそのころの築港はずっとさびしいものだった。電車は通じていたが一里ほどの間は停留所の付近に少々人家があるだけで、あとは埋立地だとか、水たまりだとか、葦が一面に生えていた。そこへ鴨が来るので鴨猟が出来た。それほどさびしかった。それからそんな葦原をへだてて、港の方に※高いガントリー・クレーンが見えていたり、※六甲山がずっと見わたされたりした。そんな所の暮れ方が十や七つの子供にはどれほどおそろしかっただろう。

私は飯を食いながらその沿道のさびしさを心の中に浮かべていた。そしてそんなことを思うと二人ともなぜもっと先ほどのように大きな声で泣いて、戻って来た喜びの興奮を端的に表さないのだろうか

不思議なような気もした。

しかし二人はかたみに問う、父母の質問に平和に返事をしていた。軍艦の話。道での話。きいていると、三郎はそれを前日から計画していたらしく、二枚もっていた電車の切符と昨日からのおやつのためたのを糧としてそれを見にゆくつもりをしていたのだ、それを何か下手なことで四郎にかぎつけられて、つれてゆかねば四郎がそれを母に言いつけるので、仕方なく、往路は電車に二人が乗って帰り道を歩いたと言うのだ。さっき、泣きわめく合間合間に四郎が三郎の讒訴をしていたのは、その三郎のためといたおやつの分配だとか、早く歩けと言って突いたとか言うことなのであった。

しかし三郎にしても、内証にぬけ出したおかげで大空に帰った小鳥のような喜びや、末っ子でのさばっている四郎を※隷属させて得々と自分の力を意識しながら、軍艦見物をした気持ちは、帰途のあまりにむごすぎる恐怖はあったにしろ、悪い気持ちではなかっただろうなど私は思った。

とにかく夕げはほっとした親子の安堵の中に楽しく終わって、私は自分の部屋へ帰って来た。

その時私は「夕凪橋の狸」ということを思い出した。それは父の知っている船の船長が一度私達の前で話した狸の話で、夕凪橋というのは築港へゆく路の最もさびしい場所にかかっている橋なのであった。夕凪橋に狸が出て何とか何とかするというその話を弟達はよもや忘れていはしまい。夕凪橋を通るとき二人はどんな気がしただろう、と私は思った。

「おい、四郎。」

私は四郎を呼んでその話をきこうと思った。

「なに。」と言って四郎は私のいる部屋へ入って来た。夕げの後の満足したおどけた心から、私は四郎の顔を見たとき、「こいつめ、一つおどしてやろう。」と思った。一つにはそれは三郎に与えられた不公平なと思われる叱責などに対するバランスとしてであった。⑥そのおどしをその後思い出すたびごとに私はいつも自分ながら恐怖に打たれるのが常である。

「おい。四郎。俺はな、夕凪橋の狸だぞ。」

そして私は眼をぎょろっとさせて四郎をにらんだ。

「やーい、嘘いってるよ。」

と大きな声で四郎は言った。

「確かにどきっとしたな、その恐怖を大きな声で追っ払おうとしているのだな。」

そう思った瞬間私はその仕事にほとんど病的な興味を覚えてしまった。

「何が嘘なものか。ハッハッハ。」

私はまた眼玉をぎょろつかせて、思い切って不自然に笑って見せた。

「いやだよう。」と言いながら四郎は右手で私の顔をたたいた。

「この顔がこわいのだな。」

私は私の中に、この芝居がいかにうまくやれるか、何とかしてうまく狸に化けたいものだという欲望とそれにともなって様々な計画がますます成長して来るのを感じた。

「へへへ。お前はお家へ帰ったと思って安心してるんだな、へへへ。化かされてるんだよ。」

私は四郎の顔が少し異様な輝きを帯びて来たのを見たと思った。そして私の部屋はしめ切られていて、家の者の気配からは少し離れていた。

「へへへへへへ。」私はまた眼をちょっとぎょろつかせた。そして口は滑稽にならない限りなるべく怪異なかっこうになってくれと、ぎゃっと開いた。

「本当にお家へ帰ったような気がするだろう。ハハハハッ。」

私がよく見た時には、四郎の顔はまるでおびえていた。

「お母さんに言いつけてやるよ。」と大きな声をあげて四郎はきびすを返しかけた。私は彼の帯をつかまえて私の前へ引きもどした。

白々しい気持ちにまでつっかえされた私のおどけた気持ちは「あ、ひょっとしたら。」と思うとたん、大きな不安の方へ馳せて行った。

「わっ。」変にゆがんだ顔がくずれたと思うと、弟は泣きわめきながら、両手で私の顔をかきむしりはじめた。まるで狂気のように、目も鼻もどこがどうの差別なしに、引っかいたのだ。

---

私はその小さい手と薄い爪がじゅうおうにはしりまわる下で考えていた。「⑦あんなことがうまくいったら大変だった。大変だった。」

そして私は早く弟をなだめなければいけないと真面目に思った。

「俺は本当に兄さんだぞ、狸じゃないぞ。」「勘弁、勘弁、嘘だよ、嘘だよ。」をかたみに火のついたように言いはじめたのだった。

（梶井基次郎「夕凪橋の狸」より・一部改）

※築港……船がとまるために築かれた港。
※折檻……たたくなどして、厳しくしかること。
※讒訴……他人をおとしめるために言いつけること。
※志賀直哉……作家。「真鶴」は志賀直哉の作品。
※芥川龍之介……作家。「トロッコ」は芥川龍之介の作品。
※叱責……あやまちをしかること。
※里……長さの単位。一里は約三・九キロメートル。
※ガントリー・クレーン……貨物などの移動に使われる大型のクレーン。
※六甲山……兵庫県南東部の山の名。
※隷属……つき従うこと。

**問一** ――a「れっきょ」・――b「こうつごう」・――c「さば」・――d「じゅうおう」のひらがなを漢字に直しなさい。

**問二** ――X「合点が行った」・――Y「かたみに」の語句の意味として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

X　合点が行った

ア　古くからの疑問が解けた　　イ　過去と現在が結びついた　　ウ　他人のことを理解できた　　エ　事情がはっきりわかった

Y　かたみに

ア　かわるがわるに　　イ　両方あわさって　　ウ　身を乗り出して　　エ　非常にはげしく

**問三** ――①「誰が食ってやるものかと思った」とありますが、次郎がこのように思ったのはなぜですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア　弟たちがまだ外にいるのに自分だけで夕食をとるのだと考えると申し訳なくなり、いままであった食欲がうせたから。

イ　母親の意に反するような行動をすることによって、無益な捜索に対する不満な気持ちを母親に見せつけたかったから。

ウ　用意された夕食はどれも冷え切っていて、これから捜索に行く自分に対する母親の思いやりのなさに腹が立ったから。

エ　夕食が用意してあると言ったわりには御飯やおかずが食器に盛られておらず、母親の手ぎわの悪さにいら立ったから。

**問四** ――②「自分ながら言い切ったなと思った」とありますが、次郎がこのように思ったのはなぜですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア　父親の怒りを恐れる気持ちに圧倒されることなく、父親の非を指摘することができたから。

イ　父親に対する積もり積もった不平不満を、ありのままに父親にぶつけることができたから。

ウ　人の気持ちを度外視して自分の考えをおし通してくる父親に、思い通りに抵抗できたから。

エ　口論を上手に切り抜けたことで、討論する上で父親に対する優位を築くことができたから。

問五　――③「正当な処置」とありますが、なぜ次郎は「正当」と感じたのですか。その理由として適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　四郎はまだまだ幼いところがあり、母親は精神的な成長を期待していたから。
イ　四郎は自分の幼さを利用しており、母親は四郎のあまえを見ぬいていたから。
ウ　三郎だけが責任を負うのではなく、四郎も同じように反省をするべきだから。
エ　父親が三郎に対して厳しくしかり、母親は四郎に対して冷たくしていたから。

問六　――④「私の同情はむしろ三郎にあった」とありますが、次郎が「同情」したのはなぜですか。その理由として適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　後先を考えずに遠出をしたことで味わった三郎の心配や苦痛が、自分にもよくわかったから。
イ　年長であることから責任を問われるという点において、三郎も自分と似た立場にあったから。
ウ　両親の心配性により三郎は今まで希望を実現できておらず、自分も同じ経験をしていたから。
エ　両親相手にむじゃきにふるまえないという性格については、三郎も自分も共通していたから。

問七　――⑤「大きな声で泣いた」とありますが、このときの三郎の心情を表した部分を本文中から十五字で抜き出して答えなさい。

**問八**　――⑥「そのおどしをその後思い出すたびごとに私はいつも自分ながら恐怖に打たれるのが常である」・――⑦「あんなことがうまくいったら大変だった。大変だった」について、〈しげる〉と〈まこと〉が話し合いをしました。以下の会話文をよく読んで、後の問いに答えなさい。

〈しげる〉ここまでの展開からすると、次郎は、［　1　］ために「夕凪橋の狸」のふりをしておどかしてやろうと考えたんだろうね。

〈まこと〉それはわかるのだけれど、「その後思い出すたびごとに私はいつも自分ながら恐怖に打たれる」のはどうしてなのだろう？だって最初は「おどけた心」で「夕凪橋の狸」のふりをしたんだよね？　「おどけた心」という表現からは「恐怖に打たれる」ことがうまく説明できない気がして。

〈しげる〉［　2　］という表現がそのヒントになるんじゃないかな？　確かに最初は「おどけた心」をもっていた。しかし四郎に「嘘いってるよ」と言われても、「いやだよう」と顔をたたかれても、狸のふりをやめないんだ。「おどけた心」だったのが、［　2　］に変わってしまったんだ。

〈まこと〉なるほどね。「自分ながらに恐怖に打たれる」のは［　3　］からなんだね。僕にもそういう経験があるよ。

〈しげる〉ところで最後の部分、「あんなことがうまくいったら大変だった」というのは、どういうことだろう？　「あんなこと」がどんなことなのか明確に書いていないからちょっとむずかしいね。

〈まこと〉こう考えてみたらどうかな。次郎が精いっぱい演技をつづけていると、四郎もそれを信じはじめてしまった。「おびえていた」という表現や、母親に言いつけようとすることからそのことがわかる。けれど、まだ完全には信じていないんだ。もし完全に信じていたら、自分を家に帰すようたのんだり、おびえきって何もできなくなったりしてしまうだろうからね。だから「あんなことがうまくいったら大変だった」というのは、［　4　］ようなことにならなくてよかった、ということだろうね。

〈しげる〉そういうことか。これですっきりしたよ。奇妙（きみょう）な終わり方だけれど、一件落着だね。

(1) 1 にあてはまる内容を「三郎」「四郎」という語を用い、三十六字以上四十五字以内で会話文の空らんにあてはまる形で答えなさい。

(2) 2 にあてはまる言葉を本文中から五字で抜き出して答えなさい。

(3) 3 にあてはまる内容として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア はじめてやったことなのに、驚くほどうまくいき、自分の非凡さに気付いてしまった

イ 冗談のつもりではじめたことなのに、引きぎわを見失い、本気になりすぎてしまった

ウ 自分からはじめたことなのに、何者かにとりつかれたように、のめりこんでしまった

エ 人から聞いた話なのに、あたかも自分が体験したことのように、再現できてしまった

(4) 4 にあてはまる内容として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 四郎が自分を狸だと信じこむことで、家族の居場所をさがそうとどこかに行ってしまう

イ 四郎が母親に言いつけることで自分は強くおこられ、兄弟の中での格が下がってしまう

ウ 四郎が自分を心の底から恐れて、兄弟の関係が取り返しのつかないほどこわれてしまう

エ 四郎が泣きさけぶことで、父親や母親だけではなく三郎にまで迷わくがかかってしまう

〔以下余白〕

# 国語解答用紙

〈R04132064〉

| 受験番号 | 万 | 千 | 百 | 十 | 一 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | |
| 氏名 | | | | | |

（注意）指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。

一

問一 a

b

c

d

問二 1

2

問三

問四

問五

問六

問七

仕事。

問八

問九

問十

35

45

という考え。

問十一

二

問一 a

b

c

d

問二 X

Y

問三

問四

問五

問六

問七

問八

(1)

35

45

(2)

(3)

(4)

折り線

〈R04132064〉

| 受験番号 | 万 | 千 | 百 | 十 | 一 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | |
| 氏名 | | | | | |

（注意）指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。

国語 採点欄

一

問一

問二

問三・四

問五・六

問七

問八・九

問十

問十一

二

問一

問二

問三・四

問五・六

問七

問八(1)

問八(2)

問八(3)・(4)